

国内経済情勢

概観

需要の増勢が強まっていることを背景に12月の生産、出荷はともに著増し、製品在庫はさらに減少した。また、労働需給はこのところひっ迫の度を強めており、卸売物価も引き続き騰勢をたどっている。

金融面の動きをみると、銀行券の伸びはさらに高まり、また、コール・レートなどが小幅の上昇をみたほか、公社債の市場利回りも強含みとなっている。

12月の国際収支は長期資本収支の流出超増大などから総合収支黒字幅はかなりの縮小をみせたが、貿易収支は引き続き大幅な黒字となっている。

12月の生産、出荷は著増

12月の鉱工業生産(季節調整済み、速報)は前月比 +2.6%と大幅に増加し、原計数の前年同月比も +14.7%と45年7月以来の高さとなった。この結果、10~12月期通計では前期比 +5.2%と7~9月期の伸び(+2.4%)を大幅に上回った。12月の動きを財別にみると、各財とも軒並み増加しているが、なかでも資本財輸送機械、一般資本財(圧延機械等)、建設資材の著増が目だった。

12月の鉱工業出荷(季節調整済み、速報)は前月比 +4.5%と生産をさらに上回る伸びを示した(原計数の前年同月比 +16.6%)。これには船舶の引

渡し集中も響いているが、これを除いてみてもなお前月比 +3.5%と著増している。この結果、10~12月期通計では前期比 +5.4%の大幅増加となった(7~9月期同 +2.9%)。

12月の生産者製品在庫(季節調整済み、速報)は前月比 -3.2%と10月以降3ヵ月連続の減少を示した。財別には、このところ出荷の好調が著しい資本財輸送機械(乗用車、トラック)、生産財(鉄鋼、非鉄)の減少が大きい。なお、生産者製品在庫率指数(季節調整済み、速報)も92.8と前月(100.2)比大幅に低下した。

12月の設備投資関連指標の動きをみると、まず一般資本財出荷(季節調整済み、速報)は前月比 +7.2%と引き続き増加傾向をたどっている。また、機械受注(船舶を除く民需、季節調整済み)は前月比 -5.9%と前月著増のあと反動減となったが、製造業からの受注は前月比 +17.0%とかなりの伸びを示している。建設工事受注額(民間産業分、季節調整済み)は前月かなりの増加のあと、12月も前月比 +0.1%の増加となった。また、官公需分は前月比 +9.8%と大幅増加を示した。

12月の労働関連指標(季節調整済み、速報)をみると、有効求人倍率は新規求人の大幅増から1.43と前月(1.34)比急上昇を示した。所定外労働時間(全産業、季節調整済み)も製造業の増加を主因に前月比 +0.9%となり、名目賃金(全産業)は年末賞与の増大もあって前年同月比 +19.5%と上昇率を高めている(前月同 +15.9%)。

12月の全国百貨店売上高は前年同月比 +19.4%

と引き続き高い伸びを示した。

卸売物価は続騰

1月の商品市況をみると、木材は訂正安(内地材)ないし上げ一服(外材)を示したものの、鉄鋼、綿糸、銅が急騰したほか、そ毛糸、セメント等も強調を示し、総じてみれば騰勢が強まっている。これは官公需などに加え、輸出、一部業種の設備投資需要など最終需要の増勢が高まっていることによるものであるが、このほか海外相場の上昇が続いていることも響いている。なお、定期市場では投機買いがみられたが2月にはいって反落した。

卸売物価(45年基準)の動きをみると、12月は繊維、鉄鋼等の上昇のほか、木材の値上がりが上旬まで続いたため、前月比+1.6%と前月(同+1.5%)に引き続き大幅な上昇となった。1月にはいってからも、繊維製品、鉄鋼、輸入農林産物等が騰勢を強めたため、製材・木製品の反落にもかかわらず上旬前旬比+0.7%、中旬同+0.3%と騰勢を改めていない。

1月の消費者物価(東京、速報)は、季節商品の高騰に加え、被服費、住居費等も強調で前月比+1.1%(前月同+1.1%)となった。この結果、前年同月比の上昇率は+6.8%(季節商品を除く総合でも+6.8%)とこのところしだいに高まってきている。

市場金利は強含み

1月の金融市場では、財政資金が租税や郵便局の受超増に加え、外為会計の揚超などから12,016億円の大幅揚超(前年同8,807億円)となった一方、銀行券の還収超が15,103億円と12月末休日の関係もあって前年(同9,215億円)を大幅に上回った。この結果、「その他」勘定と合わせた月中資金余

剰額は3,132億円(前年同332億円)となったが、準備預金の積増しがあったため、日本銀行信用の減少(主として貸出の回収)は663億円となった。この間コール市場は月初銀行券の多額の還流から小ゆるみ、4日にはコール・レートが0.25%低下したが、月央以降は季節的資金不足期入りに加え準備預金積増し需要もあって市場は引き締まり、コール・レートは24日に0.25%、30日に0.125%それぞれ上昇した(月末無条件物レート5.25%)。また手形売買市場でも都市銀行が手形売却意欲を一段と強めたものの、地方銀行等が買渋りの態度を示したため月初から出合い窮屈のうちに推移し、売買レートは12月に引き続き月中0.25%上昇した(月末買手レート6.125%)。

1月の銀行券平均発行高は前年同月比+26.2%(沖縄を除くと+25.6%程度)と昭和26年以降最高の伸び率を示した。もっとも、これには年末休日の関係で発行残高が高水準のまま越年したことや、前年1月の増勢が低かったことも響いている。また、12月の預金通貨平均残高は貸出伸長を映じて前年同月比+24.6%と引き続き高水準に推移し、現金通貨の伸びとあいまって12月のマネー・サプライは同+24.2%となった。

12月の全国銀行貸出増加額は前年同月比+31.6%とかなりの伸長を示した。大企業製造業の借入れ需要は高水準の手元現預金や資本市場からの調達増などもあって落ち着いているが、大企業非製造業では商社筋の資金需要が盛上がりを示すなど借入れ需要は増勢をたどっている。また、中小企業金融機関の貸出増加額は中堅・中小企業の根強い資金需要を映じて前年同月比6割増と高い伸びを続けた。

12月の全国銀行貸出約定平均金利は、既往住宅

貸付金利の引下げが行なわれたことなどから月中0.027%の低下(前月0.024%の低下)をみた。

1月の公社債市況は前月に引き続き軟化し、金融債、事業債のうち長期物の市場利回りは約1年半ぶりに新発債の応募者利回りを上回った。また、株式市況は1月にはいっても続騰したが、月末から2月初にかけて大幅に下落した。

12月の総合収支は黒字幅縮小

12月の国際収支をみると、長期資本収支が対世銀円貸付など大口対外投資の集中を主因に多額の流出超となったほか、短期資本収支の流入超幅もかなり縮小した。このため、貿易収支の大幅黒字にもかかわらず総合収支では202百万ドルの黒字と前月(672百万ドル)比黒字幅は大きく縮小した。貿易収支を季節調整後でみると、輸入が前月比+5.0%と高い伸びを示した反面、輸出も前月比+2.6%とかなりの増加となったため、収支じりでは前月に続き747百万ドルの大幅黒字となった。

12月の輸出を通関ベースでみると、前年同月比

+26.5%(邦貨表示額では同+22.0%)とさらに伸び率が高まった。品目別には、船舶、光学機器、テープレコーダーが引き続き高水準を持続し、鉄鋼もかなりの増加を示した。また地域別には、欧州向けが引き続き増加しているほか、中近東など発展途上地域向けの増勢も目だっている。先行指標である輸出信用状接受高(季節調整済み)は、6ヵ月連続増加のあと1月には前月比-3.3%となった(原計数の前年同月比+20.0%)。

12月の輸入(通関ベース)は前年同月比+34.1%(邦貨表示額では同+28.6%)と高い伸びを続けている。品目別にみると、原油、羊毛、鉄鋼くず等原燃料が大幅増加を示したほか、食料品も肉類、砂糖等を中心に好伸している。12月の輸入承認額(季節調整済み)は原子力燃料や大型航空機関係の大口承認もあって前月比+11.4%と著増した(前年同月比でも+46.5%と大幅増)。

1月の外貨準備高は月中509百万ドル減少し、月末残高は17,856百万ドルとなった。

(昭和48年2月6日)